

## 身近なパブリックを支える社会基盤の構築を



中井 祐  
論説委員  
東京大学大学院  
工学系研究科 教授

かつて、英国のどんな町にも存在する大衆居酒屋パブのもともとの名称が Public House であるということを知り、おもしろく思った記憶がある。地元の男たちが毎夜入り浸って、ビールを片手におらが町のフットボールチームの調子について口角泡をとばしあっている雰囲気と、自分のなかの Public のイメージとが、なかなか合致しなかったからである。とくに田舎町のパブには「ここはオレたちの居場所だ」という空気が濃厚に漂う。要するにパブにおけるパブリックは、たとえば「国民」「市民一般」といった、不特定大多数の人たちにとっての価値を意味しない。地域やコミュニティ、「オレたち」という特定多数で共有する価値であり、むしろコモンイメージに近い。

公共あるいは公共性の概念に関する緻密な議論はその筋の専門書に任せるとして、すくなくとも、いまのわれわれにとってなじみ深い「公共」は、あくまで、明治以来の中央集権的近代国家の成立発展と（とくに戦後民主化以降の）市民社会の発達という文脈のなかで形づくられてきた概念にすぎない、ということは前提とすべきだと思う。いわゆる「国家＝官＝公共」という図式における公共であり、それは個人＝民＝私との二項対立的関係を含んでいる。そして土木には、基本的に公共（＝官＝国家）に奉仕することが本義であり、公共への大義を通すことを個々の私にたいする具体の貢献よりも上位の目的に置く、という暗黙の前提あるいは精神構造がある。おのずと、土木における公共事業とは事実上、中央省庁を頂点とする行政組織による、国土や流域の開発・保全のための、河川、港湾、鉄道、道路を主とする基幹的なインフラ建設とほぼ同義であり、いまでもその意味で用いられることがほとんどであろう。

たしかに、高度成長期にまでさかのぼれば、日本のひとびとの希望はそのような公共事業に託されていた。新幹線も黒四ダムも高速道路も、当時は日本の未来を切り拓く夢と希望の造形物だった。そしてこれらの公共事業のおかげで日本国民の生活水準はおおきく向上し、それなりに豊かで安全な社会が実現した。それは確かなことである。しかし一方、いま地方中小都市の元気のなさは一様に深刻で、中心市街地は空洞化し、地域のコミュニティは機能不全、農林漁業はその持続におおきな問題を抱え、多くの集落が限界の状態にある。これら現代日本の問題を、土木の専門家としてどう受け止め、考えるべきなのか。

これらの問題は、公共と私への日本社会の極端な分化

の進行を示しているのではないかと思う。つまり、国を頂点として自治体を端末とする中央集権的（上意下達の）行政システムという巨大な公共と、自由と権利を有する近代的市民としての無数の私、という二極への分化、それにとまなう公と私の間領域の弱体化である。

たとえばそれは、現今日本の空間のありかたに如実に現れている。高速交通網など国土の骨格を決するマクロスケールの公共基幹インフラと、個人住宅などのミクロスケールの私的空間は、ひと昔前に比べれば全国おしなべて質は向上した。しかしその中間のスケールに相当する空間、すなわち地域、町、コミュニティといった空間の質はどうであろう。商店街のシャッター街化とにぎわいの消失、郊外の二次自然の荒廃、風景の均質化など、むしろ衰えていると言わなければならない。このような、公共と私の間にある領域というべき空間スケールで現象する問題群にたいして、従来の土木はほぼ無関心であったし、いまでも土木の問題として当事者意識をもって論じられることはあまりないように感じる。

人間は、公共的な世界だけを生きていくことはできないし、かといって私的な世界だけに閉じこもって生きていくこともできない。現実には多かれ少なかれ、公共と私の間を常に生きているのである。この中間領域を支える空間やシステムの質の劣化、欠如、あるいは維持不能状態にいま直面しているのだとすれば、人間の現実の生を支えることが土木の本務である以上、その解決に正面から取り組むべきであることは自明である。具体的に言えば、不特定大多数ではなく特定多数で共有し、個への具体的な還元が日常的に実感できるような価値、すなわちそれぞれの地域や町における共同体としての日常生活を価値づけるような身近なパブリック（＝コモン）の修復あるいは再構築である。近年の、公共事業の主体の多様化を扱う議論も、単に行政サービスの効率化という観点だけでなく、身近なパブリックの価値の再構築に具現しなければその意味は半減する。あわせて、その身近なパブリックを支える（巨大な公共を支えるだけでなく）ための社会基盤とはなにか、という概念の再構築も求められよう。たとえば、近年まがりなりにも蓄積されてきた各地のまちづくりや川づくりの試みのなかにも、さまざまなヒントがあるはずである。

付言すれば、いま日本が身近なパブリックの価値をなかなか実感できない状況にあるとすれば、これは現代日本社会の憂うべき弱点である。なぜなら、地域、町、コミュニティといった価値に現実の生を支えられてこそ、逆に公共の精神を尊ぶとともに私として生きてゆく強いメンタリティを、手にすることができるのではないかと、筆者は考えるからである。そして、そのようなメンタリティ（それこそ国の文化の基礎となるものである）こそ、この厳しい国内外の局面を切り抜けて新しい時代を拓くために、いま必要とされているのではないだろうか。